

小学校家庭科教育の実態と大学における 教員養成のあり方

山口 明美

要旨

小学校の家庭科の授業において、家庭科の指導力に課題が感じられる事例を耳にすることがある。

本研究は、小学校家庭科担当教員がかかえる課題を明らかにするとともに、どのような家庭科教員が求められているのかを把握し、大学ではどのような家庭科教員を養成していけばよいのかを検討することを目的とした。その結果、問題の原因として教員の多忙化や授業時数の削減とともに、家庭科のねらいや目的の理解、教材理解、実技の指導力など教員の資質・能力不足が問題となっていることが明らかとなった。問題事象にかかるデータの質的分析をもとに、家庭科の教員養成の具体的あり方として指導技術の向上と生活経験値の向上、生活の中から問題を見出し、課題を設定し、解決方法を検討し、計画、実践、評価・改善するP・D・Sサイクルを実施することにより、さらなる生活の向上のために創意工夫する力、生きる力を養うための教員養成が求められると考える。

キーワード：小学校、家庭科、指導力、教員養成、経験値

I. 研究の背景と目的

学習指導要領が2020年から変更され、「知識・技能」から、「思考力・判断力・表現力」や「主体的に多様な他者と協議する力・人間性・前向きな態度」が重視される形となり、脱指示待ち人間、アクティブラーナーの育成が求められている^①と鈴木氏は話す。2020年から全面実施となる小学校学習指導要領解説家庭科は、目標として生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住などに関

する実践的・体験的な活動を通して、生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を育成することを目指す。とある。その内容として(1)家族や家庭、衣食住、消費や環境などについて、日常生活に必要な基礎的な理解を図るとともに、それらに係る技能を身に付けるようにする。(2)日常生活の中から問題を見だして課題を設定し、様々な解決方法を考え、実践を評価・改善し、考えたことを表現するなど、課題解決する力を養う。(3)家庭生活を大切にする心情を育み家族や地域の人々との関りを考え、家族の一員として、生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度を養う。とある。つまり家庭科においては教科で育成を目指す資質・能力を「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力」「学びに向かう力、人間性等」の三本柱をたてている^②。家庭科では生活のなぜを解明し生活を創意工夫する生きる力を育成することにある。そのために「知識・技能」は基盤ともなるためこの考え方は外せないといえる。

では、その力を育成する教師に問題はないのであろうか。最近学生を指導する立場から感じられるのは、学生の経験値の低さである。小学校の教員を目指す者の大半は、中学・高校時代に家庭科の内容はほとんど記憶になく、ましては実習・演習は専門系の高校を卒業していない限り受けていないのが現状である。それは小学校現場の教員にも言えるのではないかと考えられる。今回、小学校の教員にインタビューをし、小学校における家庭科の現状と問題点を探り、今後の教員養成校における示唆を得ることを目的とした。

Ⅱ. 研究方法

本研究では、現状を把握するために質的研究を行うこととし、直接観察だけではとらえにくい事柄に関するデータを得るために当事者との会話を通じて得る方法であるインタビュー形式をとった。

1) インタビューの方法

構造化面接を用い、面接対象者に面接形式が不慣れな人もいることが考えられるため、インタビュー実施の3週間前にあらかじめ質問内容を開示し、調査参加の任意性を確認するとともに音声データの許可、及び音声データの消去は

調査実施から 24 か月以内とすることで同意を得た。

インタビューは小学校で行い、小学校で提供された場所で、1 対 1 の対面式で実施した。できるだけ堅苦しくならないよう雰囲気をつくることに心がけ、インタビューの所用時間は 1 時間前後とした。

面接実施前に面接調査の同意書を読んだことの確認、面接調査の同意書への署名、事前調査票の回収を行った。

2) 対象者の属性

薩摩川内市内の小学校 2 校

	性別	年齢層	教育職員歴			出身大学
			教員年数	小学校家庭科指導歴	家庭専科年数	
K	女	50 ～ 59 歳	33 年	10 年	0	教員養成系学部 その他
F	女	30 ～ 39 歳	4 年	2 年	2 年	他大学部（英語）
I	女	50 ～ 59 歳	35 年	12 年	1 年	教員養成系学部 その他
Y	女	30 ～ 39 歳	13 年	8 年	0	教員養成系学部 非家庭科の専門
H	男	30 ～ 39 歳	12 年	3 年	0	教員養成系学部 家庭科選修

3) インタビュー内容

ウォーミングアップとして

- 1) 家庭科指導に限らず、教員の資質、知識・技能について、最近問題がある／気になることがあればお答えください。
- 2) 家庭科指導に限らず、教員の資質、知識・技能について、最近良いと思うことがあればお答えください。

本題に関わる内容

- (1) 小学校の家庭科の授業について、問題であると思うことや気になることがあればお答えください。
- (2) 反対に、良いと思う家庭科授業の具体事例についてお教え下さい。

(3)「家庭科の担当者としての資質および知識・技能」について

先生から見て、授業者が家庭科について「知らない」「できない」と顕著に感じられることがありますか。

①実習を伴う授業において

②実習を伴わない授業において

(4)「研修・教員養成への要望」に関して

①家庭科を担当する教員としてどのような資質・能力をもっていてほしいと思われるですか。

②そのためにどのようなことを大学で学べばよいと思われるですか。また、どのような方法が適していると思われるですか。

③教員になってからの家庭科の研修について、考えをお聞かせ下さい。

Ⅲ. 結果と考察

面接内容をコード化するための対象を決定し、その分析を行った。コード内容は次のとおりである。

1.「小学校家庭科の授業内容」について

問題であると思うことや気になること

①教員としての資質 ②家庭科を指導するための知識 ③家庭科を指導するための技能 ④家庭科を指導するための経験値 ⑤授業者のおよその教職歴や年齢・性別

良いと思う家庭科授業の具体的事例

①題材や状況の内容 ②良いと思う理由 ③授業者のおよその教職歴や年齢・性別

2.「家庭科の担当者としての資質および知識・技能」について

授業者が家庭科について「知らない」、「できない」

①実習を伴う授業において ②実習を伴わない授業において

3. 「研修・教員養成への要望」に関して

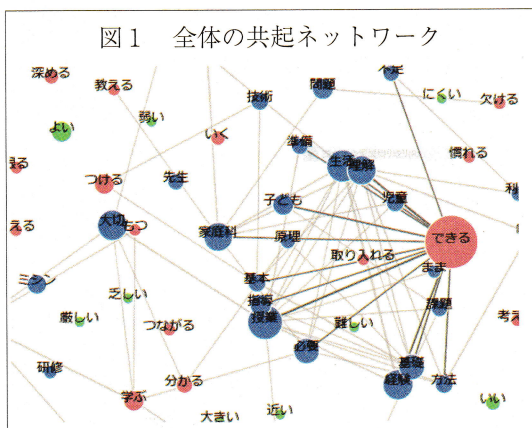
- ①家庭科を担当する教員としてどのような資質・能力をもっていてほしい
- ②そのためにどのようなことを大学で学べばよいと思われますか。また、どのような方法が適していると思われますか。
- ③教員になってからの家庭科の研修

コード化した内容を客観的に捉えるためにテキストマイニングによる分析を行った。その結果は次のとおりである。

図1 全体の共起ネットワーク

図1は対象者5名が問題点と考える内容をネットワーク化したものである。

出現パターンが似たものを線で結んだものである。また、出現数が多い語ほど大きな円で表され、共起の程度が強いほど太い線で描画されている。



ここでは、できるという表現と共起する単語として生活、理解、基礎、基本、原理、課題、経験、技術、方法、指導、問題、準備、不足などがあり、できると家庭科が同一線上に結ばれている。

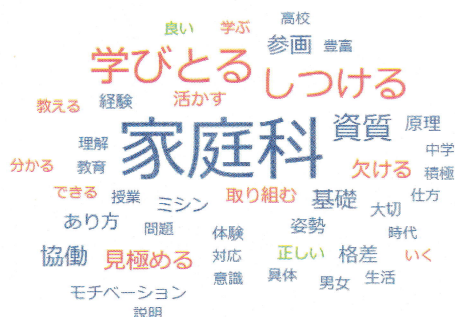
また、弱い、乏しい、厳しい、難しいなどの形容詞が目立つのが特徴である。

文章の中で大きな意味をもつ単語をスコアの高い単語として、その値に応じた大きさで図示したものが図2である。共起ネットワークでも見られた単語がワードクラウドにも出現していることが分かった。

特にこの図では技術としてミシンという単語が具体的に重要な単語となっていることが分かる。

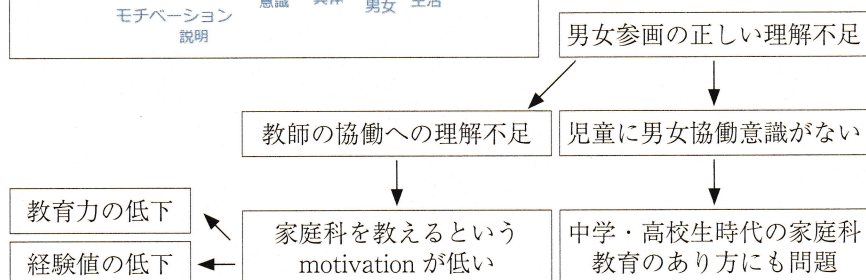
図3は全体の文章で出現傾向の似た単語ほど近く、似ていない単語ほど遠

図4 面接者Kのワードクラウド



Kさんのワードクラウド分析から考えられることは、男女参画の正しい理解不足が問題であることを指摘している。

問題点を図式化すると以下のようなものである。



気になる点として4つの項目をあげ、家庭科を指導する場合以下のような力を育成する必要があることを指摘している。

資質

- ・ 資質
- ・ 積極的に授業に取り組む姿勢がある
- ・ 苦労しても学ぼうとする姿勢
- ・ 積極的に学び取ろうとする姿勢
- ・ 見極める力がある
- ・ 創意工夫する力とセンス

知識

- ・ ミシンの原理が分かっている
- ・ 科学的根拠に基づいた技術・技能を備えている

技能

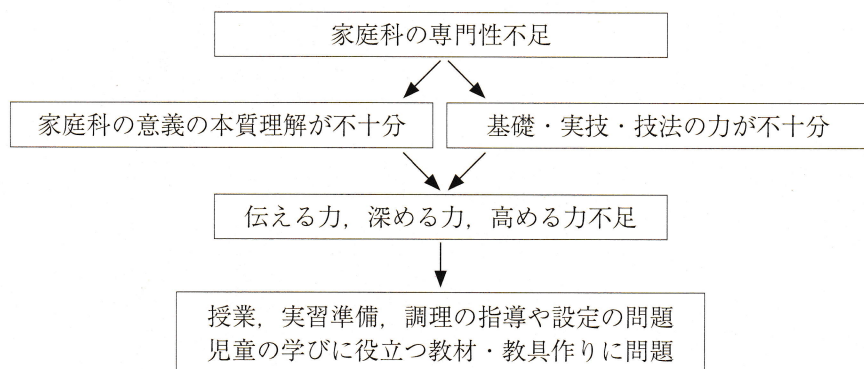
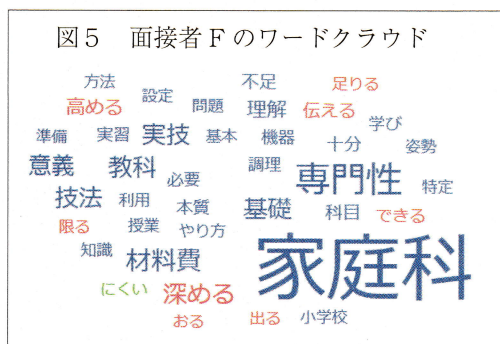
- ・ 事象や原理を具体的に説明できる
- ・ 生活に活かすことのできる知識
- ・ 家庭科の内容の基礎基本を理解する力

経験値

- ・ 生活経験が豊かで、様々な場面に対応できる
- ・ 生活経験に裏打ちされた説明ができる
- ・ 生活経験値が高く、総合的な力がある
- ・ 高い経験値により、的確な指示と授業の見極

面接者Fさんのワードクラウドを図5に示す。

この図から家庭科の専門性不足を問題とし、教師の問題点を指摘しており、次のように図式化できる。



家庭科の指導にあたって、4つの項目については次のような力を育成する必要があることを指摘している。

資質

- ・コミュニケーション能力がある
- ・家庭科の本質・意義の理解
- ・学びの姿勢

技能

- ・実技に対する基礎・基本の理解
- ・ミシンを扱う技術
- ・基礎的なことを指導する力

知識

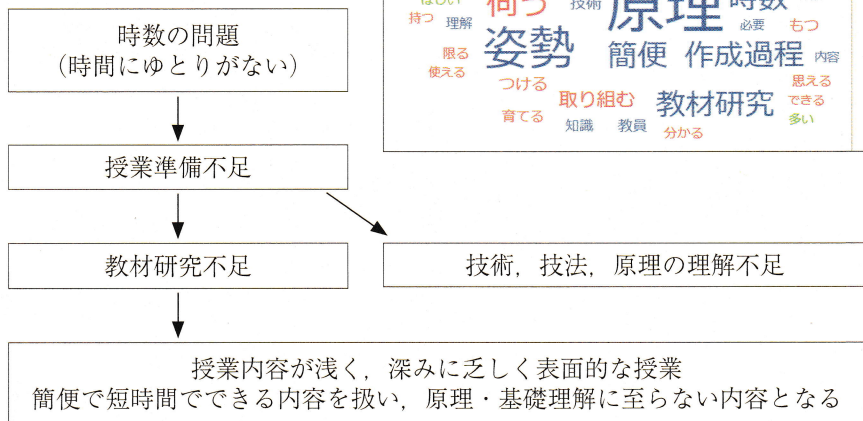
- ・小学校全教科における専門性の認識
- ・家庭科の内容の知識・理解
- ・児童に伝える技法・方法の理解

経験値

- ・伝統的な器具操作の理解と技術
- ・古来の方法の意義と意味を理解
- ・技術力を高める

面接者Iさんのワードクラウドを図6に示す。

問題点の特徴は時数が問題であることが指摘され、そこから波及する問題点が伺える。



家庭科の指導にあたって、次のような力を育成する必要があることを指摘している。

資質

- ・人間力と授業力を備えている
- ・学びながら成長する謙虚さがある
- ・興味・関心をもって取り組む姿勢がある
- ・指導力、把握力がある

経験値

- ・生活経験が豊かである
- ・生活経験が授業に生きるだけの経験値

知識

- ・児童の意欲を育てる授業ができる知識
- ・アクティブ・ラーニングの授業展開ができる
- ・原理、基礎が理解できる
- ・教材研究、教具の研究を行う力
- ・衣食住の基本的知識がある

技能

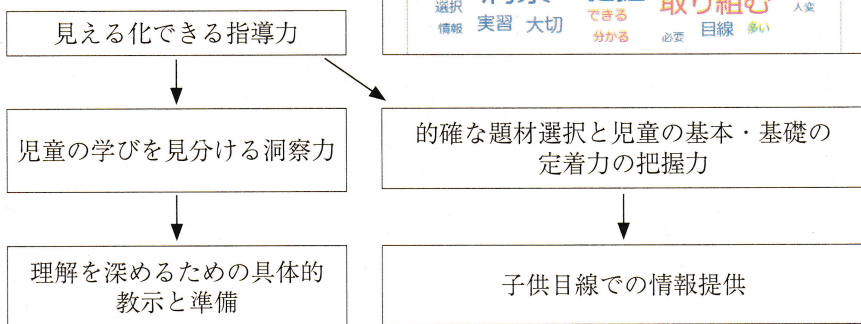
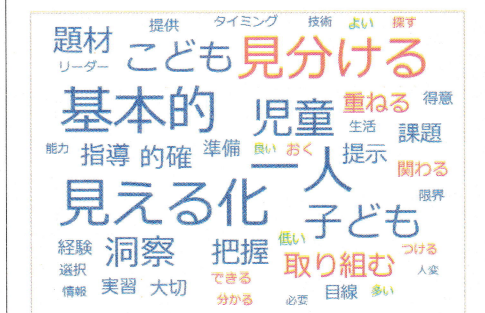
- ・調理、裁縫の基本的な技術が備わっている

面接者Hさんのワードクラウドを図8に示す。

HさんはIT時代に入り、情報の活用を提案している。

見える化できる指導力が必要であると述べる。

図8 面接者Hのワードクラウド



家庭科の指導にあたって、4つの項目については次のような力を育成する必要があることを指摘している。

資質

- ・ 児童目線での洞察力
- ・ 児童にとっての課題を見出す力
- ・ 児童の様子を把握する力
- ・ 児童の理解力を見分ける力
- ・ 安全面の大切さが理解でき、指導する力
- ・ 児童の実態にあった課題を把握し、授業準備ができる

知識

- ・ ミシン、調理などの基本的な技術がある

技能

- ・ 情報を的確に選択する能力
- ・ 情報を見える化し、提供できる
- ・ 児童の発達段階の理解
- ・ 実態にあうワークシート作成

経験値

- ・ インターンシップ、フィールドワークの経験を重ねることによることも理解

図9 単語ごとに表示されるスコアの大きさ(名詞の場合)

K		F		I		Y		H	
表現	スコア	表現	スコア	表現	スコア	表現	スコア	表現	スコア
基礎	0.63	基礎	0.63	姿勢	1.32	経験	0.05	課題	0.18
大切	0.13	方法	0.03	原理	1.75	ミシン	0.97	情報	0.02
生活	0.09	家庭科	3.97	技術	0.15	基本	0.05	準備	0.13
家庭科	3.97	専門性	1.4	ま	0.05	基礎	0.29	大切	0.13
説明	0.12	基本	0.05	意識	0.15	先生	0.01	指導	0.24
男女	0.14	不足	0.15	児童	0.53	養成	0.22	こども	0.44
豊富	0.2	意義	0.53	不足	0.15	段階	0.06	提供	0.07
具体	0.21	十分	0.21	課題	0.08	内容	0.01	児童	0.53
体験	0.09	技法	0.58	必要	0.02	教科	0.58	把握	0.3
対応	0.03	調理	0.11	基礎	0.29	である	0.03	生活	0.04
こども	0.12	機器	0.09	謙虚	0.73	使い方	0.04	技術	0.02
教育	0.03	利用	0.01	周り	0.06	簡単	0	基本的	0.7
積極的	0.7	やり方	0.05	生活	0.04	修理	0.03	洞察	0.42
授業	0.01	準備	0.01	指導	0.24	教え	0.12	的確	0.26
姿勢	0.06	授業	0.01	知識	0.09	理解	0.01	選択	0.05
あり方	0.32	材料費	0.7	経験	0.05	実態	0.07	能力	0.02
motivation	0.19	問題	0	理解	0.05	指導	0.06	見える化	0.7
時代	0.01	実習	0.12	教師	0.05	困難	0.06	タイミング	0.03
高校	0.02	設定	0.01	体験	0.02	豊か	0.05	目線	0.09
中学	0.05	科目	0.19	格差	0.42	力量	0.7	題材	0.32
理解	0.01	本質	0.09	問題	0	反映	0.12	実習	0.12
ミシン	0.26	特定	0.04	作品	0.01	家庭科	0.58	一人	0.7
原理	0.22	学び	0.13	作成過程	0.7	人間力	0.08	大変	0.01
参画	0.58	姿勢	0.06	準備	0.01	問題意識	0.7	限界	0.03
意識	0.02	実技	0.58	ゆとり	0.17	導入	0.05	得意	0.07
協働	0.7	教科	0.58	分身	0.17	方法	0	必要	0
センス	0.05	小学校	0.04	やってみる	0.22	必要	0	リーダー	0.03
裏打ち	0.58	知識	0.02	教員	0.13	構成	0.05	提示	0.19
経験	0.18	理解	0.32	授業	0.59	授業	0.11	こども	0.48
問題	0.08	必要	0.12	大切	0.53	生活	0.04	経験	0.1

図9は単語ごとに表示されるスコアの大きさを示したものである。スコアの大きさが0.5以上の名詞に赤でマークした結果、面接者が問題点として捉えているワードクラウドとの整合性が確認できた。また、面接者各々が取り上げている共通する単語を見ると基礎、基本、技術、実技、原理、体験、経験などがあげられることから、これらに多くの問題点があると認識していることがわかる。同様に動詞に関する単語では、できる、取り組む、学ぶがあげられる。図9と関連して考えた場合、基礎・基本、技術は体験、経験を重ねることによって獲得できるようになり、この経験値をあげるからこそ重要であることを示唆していると言える。

IV. まとめ

1) 小学校学習指導要領の改訂の方針

改訂の経緯として今後世界は急激に変化し、予測困難時代となっていくとともに、日本においてはさらに急激な少子高齢化が進む中であって、一人一人が持続可能な社会の担い手として、その多様性を原動力とし、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことを期待し改訂をしたことが述べられている^③つまり、学校教育において子どもたちが積極的に様々な変化に向き合える力、他者と協働して課題解決をする力、情報を見極める力とその情報を再構築して新たな価値を生み出す力を育成することを重視している。

家庭科における目標は生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住などに実践的・体験的な活動を通して、生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を育成することである。その方法としては家庭科の5領域に関する基礎知識と技能を身に付けること、課題を設定し課題解決ができること、さらに学びを通して生活をよりよくしようと工夫できる実践的態度を養うこととなっている。つまり、これらの資質、知識、技能等を教員が備えていなければならないことを意味するのである。

2) 学校現場の教員の状況

日本学術会議の健康・生活科学委員会、家政学分会の生きる力の更なる充実を目指した家庭科教育への提案－教員養成の立場から－の提案^④によると、小・中・高等学校時代に男女共修で「家庭科」教育を受けてきた大学生を対象としたアンケート結果から「暮らしに関する情報や技は主として小・中・高等学校における家庭科教育から習得したものであり、彼らはそれを実際の生活に生かしている」とし、男女共修の家庭科教育が子どもたちの生活する力を育てる重要な役割を担っていると言えるとしている。また、家庭科の重要性を再認識する結果であったが、従来は個々の家庭が持っていた「家庭の機能」が著しく低下していることも明らかとなったと報告している。一方で家庭科担当教員を対象とした「家庭科」の柱となっている各分野の授業内容に対する「得手」「不得手」についての調査によれば、大多数の教員が「得手」「不得手」があり、教員間の授業内容に偏りが生じることが懸念されると警鐘を鳴らしている。その原因としてそれぞれの「得手」「不得手」は教員が学んできた専門領域によるところが大である。「不得手」な分野の少ない、力のある教員を養成する必要があるとしている。つまり、家庭科を担当する教員には人の暮らしに関わる全ての分野について専門的な知識を持ちつつ、その全ての分野を総合的に捉える能力が要求されるということになる。

社会が成熟、多様化し、子どもや若い人たちの生活力の低下がみられる昨今、小・中・高等学校における家庭科教育の必要性は高まっている。そのためには、家庭科は内容が広範囲にわたるが、現職の抱えている問題点の解決と今後の養成課程における検討を行う必要があることを明らかにしている。

今回の面接対象者の年齢、出身大学の学部による問題点項目には大差はなかったが、自他ともに共通する問題であるのか、自分以外の問題なのかは年齢によって異なることが分かる。また、家政科系の学部で学んだかどうかで家庭科に対する知識、認識度に差があることも指摘される点であった。

小学校教員の多くは教員養成系学部で学び、家庭科選修・専門は僅かであり多くは非家庭科教科選修・専門である。これから考えられることは、広範囲に

わたる家庭科の専門内容の知見を得るのは非常に難しいことであるため、当然ながら「得手」「不得手」が生じるだけではなく、技術さえも獲得していない状況があるであろうことは想像に難くない。今回のインタビュー結果においても基礎、基本、経験、生活、ミシン、理解、学ぶ、不足、児童、授業、原理、課題、経験、技術、方法、指導、問題、準備、不足などの単語が上げられる結果となった。表出した単語から考えられることは現場教員に不足しているものが経験不足、基礎基本の習得不足、技術・方法の習得不足、学びの不足から原理の理解、問題・課題を見極める力不足、授業準備の不備であることが見えてきた。そのため児童に何を考えさせ、何を提供し、児童の何故に答えられていないため、生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住などに実践的・体験的な活動を通して、生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を育成する目標に到達していないと考えられる。特に年齢が若くなればなるほど経験値が低下し、問題はさらに深刻であると言える。

3) 今後の教員養成のあり方を検討する

新学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」が求められているようにティーチングからラーニングへ、つまりアクティブラーニングを取り入れた学習が中心となっている今、家庭科を指導する者に求められる資質の一つは、ともに学ぶ姿勢であり児童の意見、考え、子どもを取り巻く環境を受け入れ、発展していく力であると考え。家庭科の5領域に常に関心を持ち、教員自らがやってみようという意欲、教員が常に何故という疑問をもつものごとや社会の動きを見つめる眼差し、科学的に捉える思考を育成する必要があると考える。面接者が問題視する基礎・基本の多くは実技の内容に関わるものが多く指摘されていることを考える時、日々の生活の中でより多くの経験を重ねることが重要な鍵となる。そこで、限られた時間数の講義の中で調理、裁縫に関する実技は必ず取り入れる必要があろう。また、その実技をとおして科学的に考え、捉える思考を養成しなければならない。

また、指導方法、授業構成などの手法が自分のものになっていないため、教

材研究をいかにすべきか、どのような教具を準備すべきかが理解できていないという問題点も指摘された。これは根本的な問題が含まれると思われる。それは教員側が家庭科の独自性や家庭科を学ぶ意義を理解できていないことを意味する。家庭科を学ぶ意義や意味を理解することによって、様々な情報の中から発達段階に応じた情報を選択し、何を伝えるべきか、何を考え、何を学ぶべきかをおのずと見出すことができる。好きな教科は家庭科という小学生が多いという結果があるように、基本的に楽しみにしている児童とともに教員も楽しみながら授業構成を立案、実施するために家庭科を学ぶ意義を十分理解し、積極的に知見を広げる力を育成したい。

児童が学習過程を通して、生活の中から問題を見出し、課題を設定し、解決方法を検討し、計画、実践、評価・改善するP・D・Sサイクルを実施することにより、さらなる生活の向上のために創意工夫する力、生きる力を養うための教員養成が求められる。

問題の原因としての教員の多忙化や授業時数の削減については養成の段階では検討しかねるが、その現状の中にあっても、授業の充実度を高め、確保できる力と力量格差を最小限にする能力を養成することが養成校としての任務であることを確認した。

謝辞

本研究の調査において、インタビューにお応えいただきました薩摩川内市立平佐西小学校並びに薩摩川内市立育英小学校の先生方のご協力に心より感謝申し上げます。

引用文献

- ① 東京大学・慶應義塾大学教授 鈴木寛氏

「Learn for Life2018（第1回東京国際教育）祭」における基調講演 平成30年3月26、27日

- ② 小学校学習指導要領解説家庭編 第2章 家庭科の目標及び内容 (12頁)
平成29年7月
- ③ 小学校学習指導要領解説 家庭編 (1頁) 平成29年7月
- ④ 日本学術会議 健康・生活科学委員会 家政学分会
生きる力の更なる充実を目指した家庭科教育への提案 - 教員養成の立場から - 平成29年9月

論文要旨

In elementary school homemaking education and university education

YAMAGUCHI akemi

Abstract

Aimed to examine and understand this research, as well as to clarify the challenges elementary school home economics teachers have sought Home Economics Faculty, at the University of Economics Faculty training and hopefully better.

As a result, as the cause of the problem along with a reduction of teaching hours and the busy teachers, teachers, such as the purpose and aim of the home economics, learning, practice leadership qualities and skills shortage problem has become became clear.

Heading problem from the improvement of teaching skills and improve the value of life experience, living in as a specific education for home economics, based on semi-structured data problem events, to establish, and then consider how to solve, plan, practice, I think by P D S cycle evaluation and improvement to ingenuity to improve the further life of force and live feed for teacher training is required.